

# 永吉天神段遺跡

近年の東九州自動車道建設に伴う遺跡発掘調査では、大隅地域の歴史を解明する手がかりとなる重要な成果が得られています。今年度、本町では京の塚遺跡（西持留集落付近）、永吉天神段遺跡（档ヶ山集落）、荒園遺跡（仮宿上集落）が行われています。

平成26年9月10日（水）に、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターは、永吉天神段遺跡で弥生時代中期（約2100年前）の円形周溝墓をはじめとする集団墓や、葬式などの祭祀を行ったとみられる掘立柱建物跡が見つかったと発表しました。今回はこの発表を踏まえて、特集を組んでみました。

## 1 弥生時代とは？

今から約13000年前に始まった縄文時代は、主に狩猟採集を中心として展開していました。約3000年前に大陸から九州北部に伝わったとされる水稻農耕技術は、急速に日本列島に広がり、約2400年前頃から水稻農耕を中心とした食料生産が主流になっていきます。それとともに、社会生活

の様相も大きく変化します。こうして1年以上続いた縄文文化は終息し、新たに『弥生文化』が始まります。

約2200年前には青銅器、鉄器などの大陸から伝わった金属品も本格的に使用されます。九州北部を中心に銅矛・銅剣・銅戈などの武器形の青銅品が流通する一方、近畿では銅鐸などの祭祀用の青銅品が流通します。また鉄器も約2000年前頃から九州北部を中心に西日本全域に工具や農具として普及してきます。

しかし、弥生文化は食料基盤の安定と技術の進歩をもたらす一方で、食料貯蓄の格差や水田用の農地および水利の確保による集落間の争いをもたらす結果を生みました。縄文時代の集落になかった集落の形態が、過去の発掘調査で明らかになっていきます。例えば、集落の周りに濠を廻らした『環濠集落』、平地より100m以上の高い場所に集落を形成した『高地性集落』など、集落に外部の侵入を防御する性格が見られるようになります。また、弥生時代の墓では、殺傷人骨なども見られるようになります。

弥生時代になると、支配する者と支配される者が生まれ、やがて明確な階級層が成立します。このようにして生



## 2 弥生時代の首長墓

またれた集団組織は、抗争の中で組織同士の同盟、あるいは併合や合併を繰り返しながら、広域的な集団組織（クニ）を形成してきます。中国の歴史書である『魏志倭人伝』や『後漢書東夷伝』などには約1800年前、日本が大いに乱れたという記述が残っています。200余りものクニが割拠した『倭国大乱』と呼ばれる時代です。

縄文時代は、住宅近くに穴を掘って直に埋葬するのが一般的でしたが、弥生時代には集落とは別のところに共同墓地をつくるようになります。これを『集団墓』と言います。集団墓の中でも墓の形態に格差が生じます。このことから集落内の身分差があったことが分かります。

時代が下るにつれ、首長層は墳丘墓

に葬られるようになります。埋葬地の周りに幅約1〜2mの溝を掘り、溝によって区画された埋葬地は溝を掘った時の土を盛ることによって低い墳丘が形成されます。これが『墳丘墓』です。墳丘墓の溝の形が上から見て四角形だと『方形周溝墓』、円形だと『円形周溝墓』と呼ばれます。円形周溝墓は瀬戸内中部に出現し、播磨に広がり、その後徐々に東に広がります。瀬戸内地域と密接なつながりのある大隅地域にも存在しうる墓制と言えます。弥生時代後期の頃には、近畿地方や瀬戸内海沿岸でより規模の大きい墳丘墓が営まれ始めます。これがいわゆる『古墳』の基礎になっていくわけです。



▲円形周溝墓